

SS建設・設計 編

SSビジネスの将来を 見通した「LCR工法」 (ローコスト&リユース)

アスカ設計

SS建設を「ローコスト」で、さらに鉄骨などの部材を「リユース可能」に、そして従来よりも「短い工期」で実現するアスカ設計の「LCR工法」。単なるコストダウンとは一線を画しており、将来のビジネス環境の変化をも想定した「ライフサイクルでのコスト削減」を成し遂げている。

「環境変化の著しいSS業界。20年後のSSが現在の姿のまま存続しているのでしょうか、ハッキリとは分かりませんよね。ビジネス・サイクルの短期間での変化を想定すれば、建設(初期)コストの圧縮は元より、万が一「撤退」となった時の、解体費や償却資産の除却損発生も見通し

た、「ライフサイクルでのコスト』を低減させる視点が必要なので」と、同社の秋元稔夫代表取締役はその発想を明かす。では、LCR工法の特徴を、3点に大別して説明していく。

①「基礎を変える」

軟弱地盤であつても「杭打ち工法」を概ね回避。鉄骨の布基礎とすることで、基礎工費を低減させる。土地賃借契約終了時の原状回復費も削減。

②「建物(セールスルームなど)の造り方を変える」

軽量スチールパネルの組立法を採用。コストダウンと工期短縮だけでなく、ボルト結合(溶接なし)なので、解体後リ

ユースが可能。また法定償却期間の短縮も実現。

③「キャンピの造り方を変える」

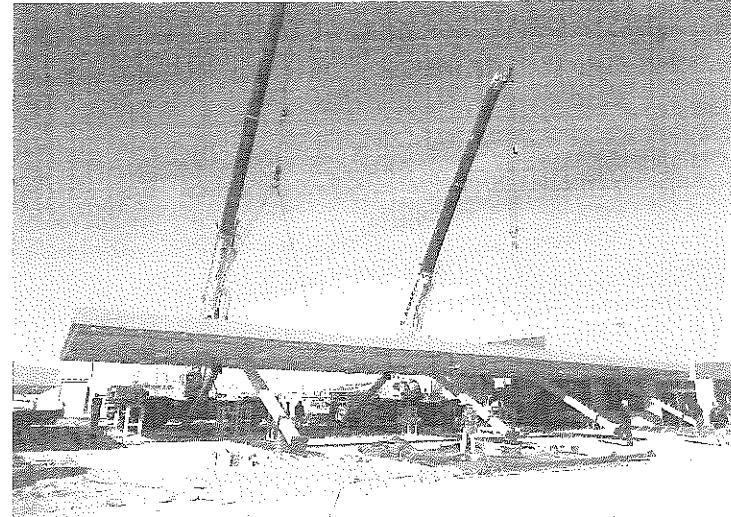
地上でキャンピを組立ての後に、吊上げ工法(高所作業を減らす)。吊上げは1日で完了し、工期短縮。工程中盤から土間打ち(フリールド作り)し、養生期間を確保することでクラック発生を抑制。

①に関して「日本の都市部」

の多くが河口平野部で形成されており、SS建設において軟弱地盤対策コストが膨らむケースが多いのです。杭工事の回避は、コストダウンと工期短縮を進めるうえで欠かせないポイントです」と秋元代表。②に関しては「鉄骨をリユースできる事から、私たちは『リムーバブル(移動でき

る)ステーション』と命名しています」

また「建設業界では人手不足と高齢化の問題が深刻化し、熟練工から多能工へのシフトが進んでいる事から、施工容易性と工期短縮に対する強いニーズがあります。LCR工法はSS業界の期待に応えると同時に、施工現場にも目を向け開発した工法です」と付け加えた。



キャンピを組み立てた後に吊り上げる工法で、メリット大